



北地域後援会是我孫子1～4・久寺家・台田・つくし野・並木・根戸・布施のエリア

しらかば北

発行責任者
井上文夫

30度を超える暑さの中、7月19日午後、我孫子駅北口に25人が集まりました。

「デモカレンダーを見てきた」という人が5人もいました。

国会前では同じ時間帯に、次々と悪法を通す動きに抗議して「NO WAR 憲法変えるな!」7・19行動が行われ、2万5千人が結集しました。全国各地でもそれに呼応する行動が行われました。

我孫子駅頭では参加者が自分の思いを書いたボードを高く掲げて、駅の階段から下りてくる人たちにアピール。そして次々にスピーチしました。南柏から来た人は「じつとしては憲法が危ない。声を上げなければ



全国行動に呼応して駅頭で訴える

「憲法を守れ!」
炎天下に我孫子駅頭に25人

という思いで参加した」と話していました。

「平和憲法、日本の宝」「高市やめろ」「国旗損壊罪法、いっくらもない」「皇室典範、憲法違反」「ナフサは必要、サナエは不要」などをラップ調のリズムに合わせてコールしました。

じつとしても汗がにじんできましたが、大きな声を出してスカッとした気分になりました。

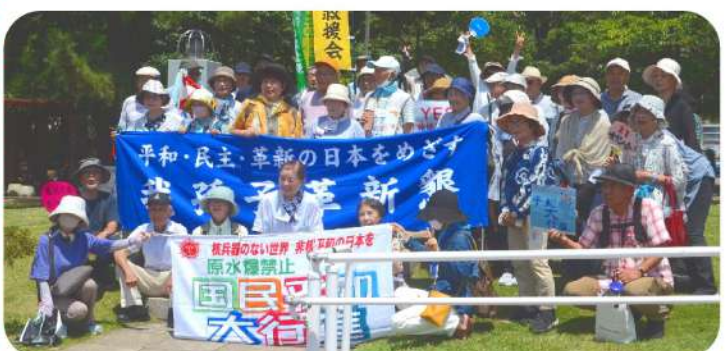
(井上)



国民平和大行進



行進出発準備完了



猛暑の中1.5kmのコースを全員が歩き通しました

天子山地下道に 滑り止めが完了

つくし野在住の方から「天子山地下道は雨で濡れると滑りやすいので手すりをつけて欲しい」という声が寄せられ、船橋まさる議員に相談。その結果、市を通して国交省に折衝したが、手すりは強度上困難との回答。市は代替策として、6月に地下道の中央通路部分に「滑り止め対策」を実施しました。(編集部)



花火

私の住まいの上空は自衛隊の飛行ルートになっていくらしい。約50年前に我孫子に引越してからずっと自衛隊機が上空を飛んでいるので間違いはないだろう。私の推測では、下総基地と百里基地を往復しているのと思っている。低いところを飛んでいるのでエンジンの音に邪魔されてテレビの音量を上げないと音声がかき消される。ここ1、2年であるが、目に見えて飛行回数が増えているような気がする。

政府の軍事強化政策と無縁ではないだろう▼自衛隊機の低く唸るようなプロペラのエンジン音は、私が5歳の頃に南九州の片田舎で聞いた米軍のB29編隊飛行のすさまじい爆音を思い出させる。北九州の工業地帯を爆撃するための飛行ルートになっていた。終戦末期には連日のごとく爆音を轟かせていた。その度に母と私と弟は納屋に掘った粗末な防空壕に身を潜めた▼駄菓子職人だった父は赤紙一つで招集されて、フィリピンで闘っていた。父は戦死し、帰ってくることはなかった。

8月15日の終戦記念日の頃になると、いつもそのことを思い出す。

(井上)

7月26日、湖北台市民センターで今年も夏休み工作教室が開催されました。

船橋まさるさんが専門分野でもある木材を使った身近な用具などを、子供と一緒に作るという工作教室です。6年くらい続けてきましたが今回はお母さんたちを含めて27人参加され賑わいました。

夏休み工作教室



椅子や本箱
ペン立ても

材料の板・釘などは残材などを利用して、船橋さんが組み立ててしやすいように、事前に加工もされていました。

ペン立ては5人、本立ても5人、椅子も5人が挑戦して、皆完成の笑顔いっぱいでした。

最後に物入れが一つ出来ました。欲しかったけどジャンケンで貰えなかったという女の子に大泣きされて弱ってしまいましたと、優しい船橋さんは話していました。

子どもたちが、自分の手で物を作ることは本当に少なくなっています。

物を作る完成の喜び。間違っても、失敗してもなお、挑戦すれば自分が作った、たった一つの宝物ができるのだよ、という船橋さんの想いでしょう。

(江角)

無言館

へ行く



渡辺誠二

先月、長野の上田市郊外の「無言館」戦没画学生慰霊美術館を訪れた。窪島誠一郎さんが、「しんぶん赤旗日曜版」に昨年3月から一年間にわたり、「無言館のうた」を連載してきた。毎週、日曜版を手にとすると真っ先に読んでいたので、実際に展示されている美術館を訪れた次第である。

日曜版には作品と共に、作者や家族の関わり合いが詳しく説明されていた。アジア・太平洋戦争の末期に美術学校を繰り上げ卒業して、出征して戦死した画学生の作品をこれだけ集めて展示している美術館はないと思う。

「無言館」へ入ると静かで戦没画学生の作品がずらりと展示されている。多くの説明はなく、作者の説明が簡単に出ているので、どういう背景で作品ができたかはよくわからないと思う。訪問前に、日曜版の切り抜きを読んで行つたので私は見たい絵を絞って見てきた。

日曜版連載の25回で「特攻兵」を絵筆で見送るという、大貝彌

太郎「飛行兵立像」があった。

大きな絵で特攻機に乗る少年飛行兵を出撃記念に描いた肖像画で展示されている作品はボロボロに損傷していて、説明文に描いている写真が映っていた。敗戦濃厚な時期に、若い少年兵を特攻で命を奪った軍国主義に憤りをあらためて覚えた。

昭和18年11月の学徒出陣により、画学生などは学業を強制的に終了され、戦地に送られたが、無言館には500人を超える戦没画学生の絵が収蔵されている。連載では優秀な人が多くいたことも紹介されている。

なお、「無言館のうた」が本になり、新日本出版社から今月出版されている。

無言館を後にして、近くの別所温泉に泊まった。源泉かけ流しの古い温泉である。温泉街の一角に「山宣」と「高倉アル」の碑を訪れた。信州は古くから農民・革新運動の伝統があり、戦前右翼に暗殺された山宣(労農党衆議院議員 山本宣治)を追悼する碑である。

寄稿 小原 紘

②

「隣国の森」

NHKのハングル講座が始まったのは1984年4月である。友人たちと韓国語の勉強を始めてから8年経っていた。

どうして韓国語?と聞かれることがしばしばあった。面倒くさくて「隣の国の言葉だから」と答えていた。茨木さんも同じ答えをしていたのを知った。「隣国の森」から彼女の韓国(語)に対する熱い思いが沸き上がる。私は茨木さんの詩をコピーして説明代わりにした。他人の詩を借りてずるいようだが私の思いもこれに尽きた。

ハングルの清冽な響き。かつて国を奪い、言葉と精神まで奪おうとした日本人が韓国語を学ぶ意味。朝鮮の地図に墨を塗りつつ併合される国の人々を思った石川啄木、獄中で死ぬ最後までハングルで詩を書き続けた朝鮮の詩人尹東柱(ユン・ドンジュン)。

朝鮮と日本のことを知りたい。歴史も文化も、言葉

も学びたい。仲間と未知の世界に乗り出していった半世紀前の記憶。ラジオ講座が始まる2年前に発表されたこの詩をとおして茨木さんは韓国語の勉強を始めた多くの学習者と心の友達になった。

韓国語の勉強を始めてから15年後、1か月間の休暇を取って韓国のひとり旅をした。出入国管理事務所で15日間の観光ビザ延長の申請をした。下手くそな韓国語でよくぞ延長が出来たと皆から褒められた。理由は簡単だった。韓国語が下手だったからだ。それだけ情熱溢れる充実した旅行になった。

旅行記を配つたら思いのほか好評だった。茨木さんからは「一緒に旅行したかのようにときどきした」とうれしい感想が届いた。

詩「隣国の森」は長いのでここでは省略するが是非一読を薦めたい。韓国だけではない。奢れる日本人がアジアとどう付き合うべきか学ぶことが多いはずだ。

(続く)